

現地での取り組み

南西諸島の新規土地利用型作物「ソバ」の普及拡大に向けて

栽培期間が短く、手間もかからないソバは、粉にして麺などの食品や加工品に利用しやすいことから全国的に6次産業化の素材の1つになっています。しかし、なぜか南西諸島では栽培されておらず、ソバの品種開発を担当する私としては、南西諸島へのソバの導入可能性を検討したくなりました。（「沖縄そば」は主に小麦粉です。）散在する情報を集めたところ、1）ソバの需要が高くなる夏に品質の良い新ソバを出荷できる、2）気象災害リスク分散により国産ソバの安定供給に繋がる、3）サトウキビやパイナップルの休閑期にソバで地表を覆うことで赤土の流出を減らせる、など大きなメリットがあると考えました。

南西諸島でのソバ栽培に関する研究知見はほぼ皆無でした。そこで、沖縄県農業研究センターや名城大学の協力で、南西諸島に適する品種の選定、播種適期、播種密度など基礎的な研究を細々と始めました。取り組み当初から、沖縄産のソバを切望しているソバ専門店や飲食業、沖縄総合事務局関係者に協力いただき、少しずつデータを蓄積できました。沖縄対応特別研究（2007年開始）では、沖縄県農業研究センター名護支所と協力して、南西諸島に多い強酸性土壌でも堆肥の活用で他地域のソバ産地と同等の多収が可能で、化学肥料も大幅に減らせることがわかりました。また、2008年に実施した所長キャラバンを契機に、農機メーカーや製粉業者の協力も得られ、コンバインを使った規模での実証試験の成功により研究成果としてまとめることができました。

今回、当センターの所長や関係者が、ソバの導入に取り組んでいる大宜味村、宮古島、名護市、今帰仁村の現地圃場などを見学し、意見交換をしました。

大宜味村では、役場の強力なバックアップの下、2009年から南西諸島で最も早くソバの機械化栽培に取り組む、6次産業化による販路開拓にも成功しています。しかし、不安定な収量が課題で、土壌水分過多による湿害が主因とされています。現在、農林水産省の農食事業の支援によりアップカッターロータリーを用いた畦立て播種による湿害軽

減効果や、排水性のよい圃場を効率的に選定する方法を検討しています。

宮古島は、サトウキビの輪作作物としてのソバを導入すれば高品質なソバを大ロットで生産できる産地になる可能性が高いと、早くから着目していた地域です。2002年頃から宮古総合実業高校がソバ栽培試験を継続し、機械化が不十分な中、現在までにソバ栽培を数haまで拡大されております。私はアドバイスする役割でしたが、「普通に栽培すると多収」となり、すぐに対応すべき問題がなく、研究者の私としては研究テーマを立てにくい皮肉な状況となり、口惜しく感じていました。最近、研究成果の広報普及とともに、宮古島に関わる機会も多くなったので、実需者や農機メーカーと協力しながら、宮古島の強みを活かす方法を検討しているところです。

名護市は区画が大きめで排水性の良い畑も多く、「種を播いて収穫する土地利用型作物」を導入したいと考え、ソバも候補にあがっています。南西諸島では苗で植え付ける作物が多く、大面積に種を播くという作業や汎用コンバインの利用は非常に珍しいものです。これまで南西諸島で取り組んできた堆肥利用や湿害回避、播種や収穫技術などを含め、この地域でも十分に応用できるものではないか、と考えています。

今後は、これまでの取り組みを継続しながら、品質が高く、収量の安定した南西諸島向け新品種を開発し、さらに当センターが南西諸島のソバ栽培のハブ機能を担うことが期待されると考えています。これからも、いろいろな分野の研究者や関係者とのシナジー効果を活かしながらソバの普及拡大に取り組んでいきます。

【作物開発・利用研究領域 原 貴洋】



民泊でのソバ打ち体験



宮古島の広大なソバ栽培予定地